

岡崎城跡月見櫓発掘調査 現地説明会（H29.9.2）

岡崎市教育委員会

〔発掘調査〕：平成29年8月14日～平成29年9月22日（予定）

〔調査経緯〕：岡崎市教育委員会では「岡崎城跡整備基本計画 - 平成28年度改訂版 -」（H29.3）に基づき、今後岡崎城跡の整備を検討するための基礎となる岡崎城の城郭遺構について、積極的に調査研究を進めている。この調査研究の一環として、今回月見櫓およびその周辺の発掘調査を実施している。

〔櫓と月見櫓〕

- ・櫓（やぐら）：平時は物見のためや武器庫として使用し、戦時には攻撃や守りの要の施設として使用。
- ・櫓の種類：建物の階層や形状、立地、用途などから様々な種類がある。
例）三重櫓、二重櫓、平櫓、隅櫓、多門櫓、太鼓櫓、月見櫓、富士見櫓、井戸櫓
- ・月見櫓：「月見」をする目的の建物であり、他の櫓とは役割が異なる。そのため、他の櫓に比べ上階の開口部が大きく、開放的な構造となる。

〔岡崎城の月見櫓〕

- ・岡崎城の月見櫓は古写真に写るが、明治6年（1873）の廃城令により天守等とともに解体された。
- ・古写真に写る月見櫓の建築年は不明。ただし、前本多家城主時代（1601～45年）の絵図にも現在地に2階建ての建物が描かれており、この頃に初めて月見櫓（二重櫓）が建てられた可能性が高い。
- ・天守のある本丸に立地し、月見櫓から東側に脇多門櫓、平櫓、風呂谷門と建物が連続する。
- ・南方を遮る建物がなく月見にはよい立地であるとともに、眼下には「風呂谷曲輪」の狭い通路を見下ろす立地にあたることから戦時には防衛の拠点にもなる。

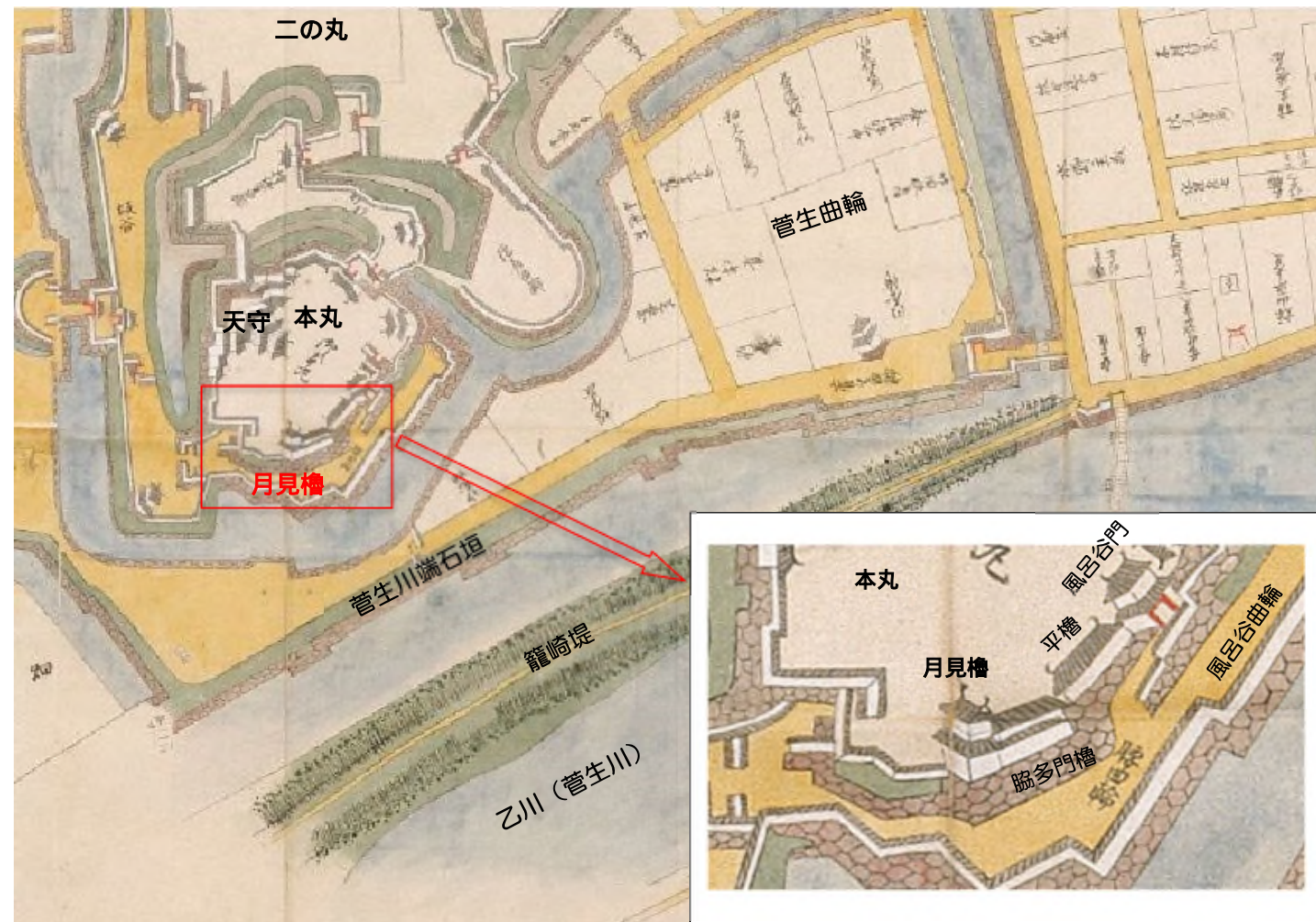


図1 岡崎城絵図における月見櫓及びその周辺

〔絵図等にみる月見櫓〕

●前本多家時代（江戸時代前半）

建物配置を描いた絵図によれば、2階建ての建物と脇多門櫓が描かれる。2階建ての建物が月見櫓であれば江戸時代の初めには存在していた事になる。ただし、古写真の月見櫓が江戸時代初めからずっと建っていたものとは考えがたい。

●水野家～後本多家時代（江戸時代前半～末）

水野家時代には二重櫓が描かれており、月見櫓である可能性が高い。後本多家時代の絵図（1781年写し）に「月見櫓」と明記されるものがあり、江戸時代後期には月見櫓として確実に存在したといえる。また、脇多門櫓（二重櫓）、平櫓、風呂谷門も描かれており、詳細がよくわかる。

●描かれた月見櫓

江戸時代後期の岡崎藩士・松下鳩台（1771～1849）により月見櫓が描かれている。月見櫓は重箱櫓（総二階造り・1階と2階の平面が同規模）であること、屋根の両端には鯨（しゃちほこ）が載ること、2階には高欄が表現され月見の場であったこと、1階には窓や防御用の狭間があったことなどが分かる。

脇多門櫓も二階造りで、同様に鯨を載せるが月見櫓のような開放的な空間はなく、壁に四角い窓（狭間）が描かれるのみで、防御施設としての櫓である。月見櫓西側に延びる堀は曲輪の地形に合わせて折れながら延び、壁には狭間が切られている。

〔古写真にみる月見櫓〕

廃城令により解体される前の姿を写した古写真（明治5年頃）からは、重箱櫓で2階の南半が板戸で開放されていることや、高欄が廻ること、1階は格子窓や狭間があることなどがよくわかる。

松下鳩台の描いた月見櫓（図4）と特徴がよく似ることから、古写真に写る月見櫓は少なくとも江戸時代後期には建てられていた可能性が高い。

その他、月見櫓西側（写真左側）には堀がなく、月見櫓東側（写真奥）には脇多門櫓もないことから、それぞれ月見櫓とは解体時期が異なる可能性が高く、江戸時代末期に既になかった可能性もある。



図2 前本多家時代



図3 後本多家時代（1781年写し）



図4 松下鳩台の描いた月見櫓（後本多家時代・江戸時代後期）



写真1 明治5年（1872）頃の月見櫓の西面

【月見櫓・脇多門櫓の規模】

明和7年（1770）の「書上文書」（城主が松平から本多に交代した際の引き継ぎ書）に城内の建物の規模が書かれている。これに月見櫓と脇多門櫓の規模も明記されている（平櫓と風呂谷門は未記載）。

月見櫓

桁行3間1尺（約5.7m）

梁行3間2尺（約6.0m）

脇多門櫓

桁行9間（約16.2m）

梁行3間（約5.4m）

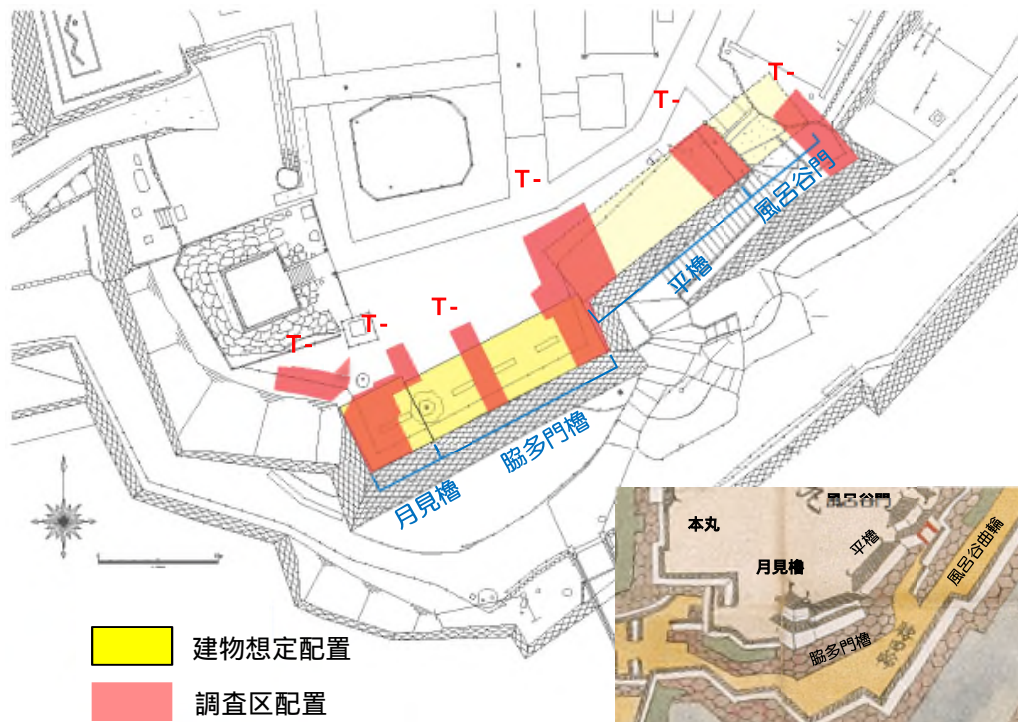


図5 調査区（トレンチ：T）配置図

【発掘調査の状況】

【トレンチ（塀）】

月見櫓の西側に位置し、絵図では月見櫓から延びる塀（土塀もしくは築地塀）が描かれている。

発掘調査では塀の基礎となる石列を確認することを目的としたが、石列は確認されず塀の形式（土塀もしくは築地塀）について明らかにすることができなかった。

調査区の東端部で月見櫓の北面の基礎石積みと思われる石列が確認された。



写真2 トレンチ 全景（東から）

【トレンチ（月見櫓）】

月見櫓の平面積の約2/3を調査した。櫓の南・西面にあたる櫓台石垣の天端石材に建物の土台木を載せるための加工痕跡が確認された。東面では基礎石積みを確認されたが、調査区外へ延びるため、北面に折れる地点は確認できていない。調査で確認された月見櫓の規模は、東西（桁行）約6.2m、南北（梁行）（トレンチで確認した北面の基礎石積みで計測）8.7mを測る。

書上文書と調査数値を比較すると、東西は約0.5m、南北は約2.7m大きくなり齟齬が生じる。建物の増改築による拡張なども可能性として考えられることから、今後も検討が必要。



写真3 櫓台石垣の加工痕跡（東から）
土台木を載せるために石垣を平滑に加工している



写真4 月見櫓全景（東から）



写真5 月見櫓・脇多門櫓接続部（北東から）

【トレンチ（脇多門櫓）】

脇多門櫓の中央部よりやや西側にあたる。建物北面の基礎石積みと石組溝を確認した。基礎石積みは2段積みで、高さ約45cmを測る。櫓台石垣の天端から基礎石積みまでは約5.1mを測り、書上文書の3間（5.4m）よりやや小さい。

石組溝は排水用と考えられ、底面には小礫が敷き詰められている。基礎石積みから石組溝の中心までの距離は約1.0mを測り、屋根の雨落ち溝としては近接することから、軒下に位置する排水溝と考えられる。

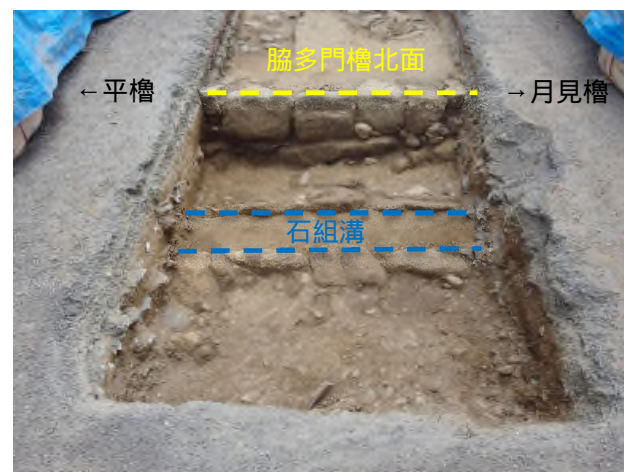


写真6 脇多門櫓（北から）

【トレンチ（脇多門櫓・平櫓）】

脇多門櫓北東端部と平櫓西端部にあたる。脇多門櫓の北西隅部周辺の基礎石積みと、これに平行する石組溝が確認された。櫓台石垣の天端から基礎石積みまで（南北）は約5.3mを測る。脇多門櫓の東面とトレンチで確認した月見櫓との接点まで（東西）は16.2mを測り、いずれも書上文書の数値とほぼ一致する。

平櫓は基礎石積みは確認できていないが、脇多門櫓からの石組溝が平櫓沿いに折れている状況が確認された。平櫓の規模の特定はできないが、平櫓の櫓台石垣から石組溝までの距離（南北規模）が約4.5mを測ることから、脇多門櫓より一回り小さい規模が想定される。



写真7 脇多門櫓・平櫓（西から）

【トレンチ（平櫓・風呂谷門）】

トレンチは風呂谷門の基礎部分の確認のために調査区を設定した。石垣の裏込めのような円礫が多く確認されたが、現在も調査中であり今後詳細が明らかになる予定。